「内裏、そして京都御所」の教材化にむけて

佐　藤　泰　弘

はじめに

海外からの留学生に日本語を教える時、言語教育とともに、日本語が形作られ使用されてきた社会的・文化的背景を学ぶ機会を設けることも必要であろう。その際、現代社会に対する理解とともに、伝統文化への理解を促すことも大切になると考えられる。

留学生が日本の学生と交流し一緒に学ぶこともある。伝統文化への理解は日本で育ち暮らしていても十分ではない。伝統文化を学ぶ場は、海外からの留学生と日本の学生が学びを共有する場にもなり得るのではなかろうか。

伝統文化を教える時、その歴史性を正しく伝える必要がある。伝統文化というのは、その社会で長く伝えられてきた文化であるが、それには歴史がある。E. ホブスボウムの「創られた伝統」ではないが、伝統は単に継承されてきたものではなく、ある時期に伝統として発見される。留学生が学ぶ日本語も明治時代に作られた「国語」である。実用的に言語を学びながら伝統文化を学ぶうえでは、一般情報や観光情報で十分という考え方もあるだろう。しかし歴史性を学ぶことで伝統文化への理解を深め、伝統を相対化する視角を持つことによって新しい発見がある。

関西には日本の伝統文化に接することができる場が数多くある。なかでも京都御所は象徴的な場である。教員が留学生を引率して京都御所に出かける場合、多種多様な観光ガイドブックを参照することができ、その情報はウェブサイトにも溢れている。しかし大学生が学ぶ内容としては、やや物足りない。本稿は

留学生と日本の学生（以下では両者を区別する必要が無い場合には両者を合わせて学生と表記する）がともに京都御所について学ぶために、社会人向けの講演会で話した内容を教材化した際の覚え書きである。

１．講演会の構成

この講演会は 2009 年６月 13 日に行った甲南大学公開講座「伝統的なものにふれる」の第５回「内裏、そして京都御所」である。概要は以下の通りである。

はじめに
京都御苑
　現在の姿
　京都御苑と平安京
大内裏
　平安京の大内裏
　朝堂院
内裏での政事
　朝堂院から内裏へ
　「政務の場」と「政務の形態」
里内裏の時代
　内裏から里内裏への推移
　土御門東洞院殿の来歴
おわりに

上記のように講演会では、古代・中世における政事の仕組みと変化について、政務の場に注目して説明した。政治過程を追いかける政治史でも、内裏の殿舎に注目した建築史でも、行政手続を検討する制度史でもなく、それらを融合した内容を目指した。

著者の専門領域から古い時代が中心である。しかし今の京都御所の原型であ

る土御門東洞院殿に至っていること、その後の変化にも言及していること、政治の場が重要であることは洋の東西を問わず現代にも当てはまることから、この講演会の内容をもとに、学生が京都御所について学ぶ教材を作った。

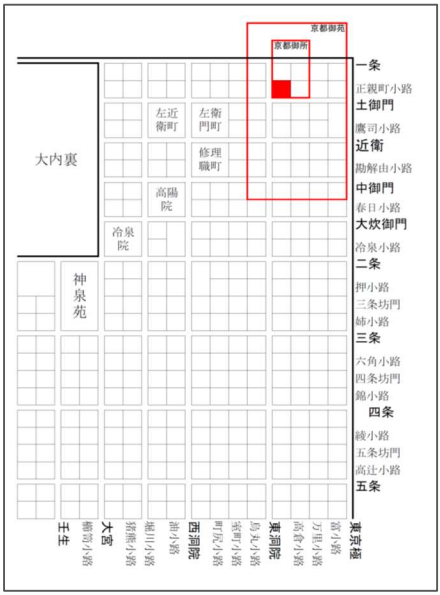
２．教材の構成と留意点・課題

学生に向けた教材は、以下のような構成と論点に整理し直した。

はじめに
　言語教育　文化的背景／伝統文化の理解　→正確な歴史理解
　京都　　「千年の都」→平安京を投影することの問題点
１．京都御苑
　京都御所　仙洞御所
　大内保存事業　明治 10～16 年
　大正期の整備　大正２～３年　　大正天皇の即位大礼
２．平安京の大内裏
　難波宮→飛鳥浄御原宮→藤原宮→平城宮→長岡宮→平安宮
　大内裏　　内裏・朝堂院・豊楽院・諸官司
　政務の場　朝堂院　→紫宸殿　→清涼殿
３．政事の変遷
　貴族・官僚が一堂に会し天皇が臨席して行う政事（大内裏・内裏）
　　→　天皇のもとに上級貴族が集まって行う政事（内裏・里内裏）
　　→　天皇・上皇等の居所を使者が往来して行う政事（里内裏）
　　実務官僚は自宅で執務
４．内裏・里内裏から京都御所へ
　土御門東洞院殿　　延元２年（1337）光明天皇
　　永禄 12 年（1569）織田信長による大修理
　　天正 19 年（1591）豊臣秀吉による新殿造替
　　慶長 18 年（1613）徳川家康による新殿造替
　　寛政２年（1790）再建　裏松固禅『大内裏図考証』
　　安政２年（1855）再建　現在の御所
おわりに

この教材を構成するうえで留意した点や今後の課題となる点については、以下の通りである。

(1) 都市域の歴史性



京都は「千年の都」と言われることがある。京都を訪れて、日本の各地にあるようなビル街を目にしても「千年の都」という認識が揺らぐことはない。1000 年も経てば変化するという常識も影響していると思う。訪問者は新しい京都のなかに古都を見出し、そこで伝統を確認する。

794 年に桓武天皇が平安京に遷都してから明治天皇が東京に奠都するまで、重要な例外はあるにせよ、基本的に天皇は京都を動かなかった。京都の街区は平安京の条坊制に由来した碁盤目状の町割りがあり、京都の随所に寺社・建築など伝統的な建築がある。そして京都御所を含む京都御苑がある。

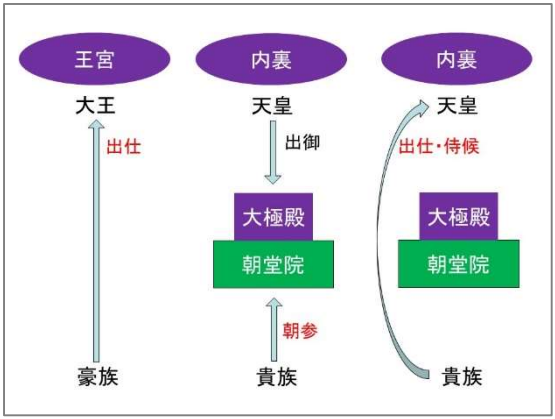
ただし京都御苑は平安京の領域に収まっていない。このこと自体が古都の歴史的変化を示している。京都の碁盤目状の街区は、平安京をベースに置きつつも、時代とともに大きく変わってきた。平安時代においても、住宅が集中していたのは大内裏の東側を中心とした左京の北半分である。右京には田園も広がっており、平安京がくまなく都市化していたわけではない。その一方、鴨川をわたった白川や平安京の南郊にあたる鳥羽など、平安京の周辺地域が衛星都市のごとく発達する。西ノ京の発達もみられ、応仁の乱後に上京・下京が成立する。

平城京が京内に多数の寺院を置いたのに対して、平安京に設けられた寺院は東寺・西寺だけであった。東西南北の京極（平安京の外縁）に近接して設けられた寺院はある。京内に寺院を置かないという規制は、社会的な規範として共

有されていたのだと思われる。その規範も中世後期になると形骸化し、豊臣秀吉の京都大改造によって一変する。

京都に限らず都市域の歴史性を考えるという視点は重要であり、京都はその変化を具体的に追跡できるフィールドである。学生が京都で伝統文化を学ぶという場合、都市域をテーマにしたフィールドワークを行うという視点が有効であると思う。そのような視点は、平安京だけでなく、城下町・門前町等に由来する日本の都市、海外の諸都市でも応用できる。それは伝統と現代を考える手掛かりになるはずである。

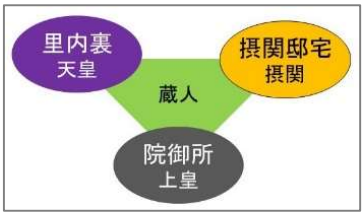
(2) 空間や建物の持つ政治的機能



政治的な空間は、様々なスケールで説明することができる。儀式書に詳細に記された政務の舗設や座次から、都城の空間構造、さらに国土の設計にまで至るかもしれない。京都御所は里内裏に由来することから、京都御所を取り上げるには王宮の歴史を辿りながら里内裏に至る変化を説明する必要がある。都城の都市空間ではなく、天皇の居所と政務の場という視角である。

過度に専門的にならず、日本の高校で学ぶような概説を基本とするのが良いと考えられる。そこで一般的であるが、難波宮→飛鳥浄御原宮→藤原宮→平城宮→長岡宮→平安宮という王宮の歴史を振り返る。

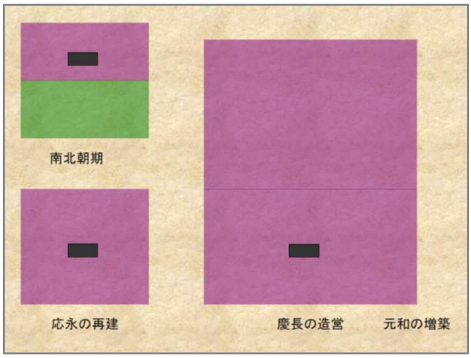
そのうえで、天皇の居所を含む政務の場である大内裏を中心として、内裏・朝堂院・豊楽院・諸官司などの配置や役割を概観する。とくに天皇が臨席する政務の場は、朝堂院→紫宸殿→清涼殿と変化していくので、その過程を概観す



る。その際、律令政治の基本構造とその変化について、天皇が決裁する場という観点から簡潔に説明することにした。

空間の政治性を説明することは抽象的になりがちである。そこで政務の場に集う人々を中心に説明した。貴族・官僚が一堂に会し天皇が臨席して行う政事（大内裏・内裏）→天皇のもとに上級貴族が集まって行う政事（内裏・里内裏）→天皇・上皇等の居所を使者が往来して行う政事（里内裏）という段階を図式的に示した。とくに政務を具体的にイメージしやすくするため、藏人の働きを強調した。学生への説明としては専門的すぎるかもしれず、厳密な歴史研究としては簡略化しすぎているかもしれず、この点は更に考えていく必要があると思う。

(3) 土御門東洞院殿から京都御所へ



平安時代・鎌倉時代を通じて色々な邸宅が里内裏として用いられた。延元 2 年（1337）に光明天皇が土御門東洞院殿を里内裏とした後、ここが天皇の居所として定着していった。

現在の京都御所は土御門東洞院殿に由来する。この里内裏は歴代の権力者によって維持され、拡張されてきた。例えば、永禄 12 年(1569) には織田信長による大修理が行われ、天正 19 年(1591) には豊臣秀吉が、慶長 18 年(1613) には徳川家康が新しい殿舎を造営している。

寛政の造営では裏松固禪の考証が基礎になった。裏松固禪は宝暦 8 年(1758) に起こった宝暦事件に連座した公家の一人であり、蟄居のなかで有職故実の研究をすすめ『大内裏図考証』などを書いた。その学識により老中松平定信に抜

擢され、寛政２年（1790）に内裏を再建した時には裏松固禅の考証を用いて、平安時代の内裏の様式が再現された。安政２年（1855）に再建された際にも復古的様式が引き継がれ、現在の御所に至っている。

京都御所は仙洞御所などとともに京都御苑に含まれている。京都御苑が現在の形になったのは、明治10〜16年に行われた大内保存事業による。また大正天皇の即位大礼に合わせて、大正２〜３年にも整備が行われた。

京都御所だけでなく京都御苑を説明するならば、空間の広がりについても説明することが望ましい。中世における里内裏を中心とした陣中の研究、近世における禁裏・公家町に関する新しい研究等、里内裏・禁裏を中心とした空間構造の研究を組み込む必要がある。それは(1)と(2)の中間に位置する論点になるが、今回は主たる対象としておらず、十分に取り組むことができていない。今後の課題としたい。

おわりに

この教材はパワーポイントのスライドによる講義用教材を想定している。それを踏まえてフィールドワーク用のテーマを設定し、それに応じた教材を設計することもできるように思う。

現在は『京都・観光文化時代ＭＡＰ』のような重ね合わせ地図により、歴史の地図と現代の地図を参照できるようにしたガイドブックも出版されている。それとは異なる切り口により、学生用が京都御所や京都御苑だけでなく、京都の伝統文化を探訪する教材を作ることも考えてみたい。

なお平安京や政務の変遷を説明するための図版は文学部歴史文化学科の専門科目「日本史概説Ｉ」「日本文化史」でも使用している。しかし海外からの留学生に向けて説明するという観点を持ったことによって、説明の仕方の曖昧な点つまり日本人に対して説明するうえで暗黙の前提としている事柄に気付くことができた。そこから研究の課題を見つけることもできたことを付記しておきたい。

【参考文献】

新創社編『京都・観光文化時代ＭＡＰ』(2006 年)
新創社編『京都時代ＭＡＰ　平安京編』(2008 年)
藤岡通夫編『日本の美術８　京都御所と仙洞御所』(1974 年)
橋本義彦『平安貴族』平凡社選書（1986 年)
岸俊男編『日本の古代７　まつりごとの展開』中公文庫（1996 年)
小泉和子『室内と家具の歴史』中公文庫（2005 年)
財団法人有職文化協会『京都御所』(1982 年)
古代学協会編『平安京提要』角川書店（1994 年)
京都大学文学部博物館『公家と儀式』(1994 年)
京都市参事会編『平安通史』復刻版　新人物往来社（1977 年)
島田武彦『近世復古清涼殿の研究』思文閣出版（1987 年)
岸泰子『近世の禁裏と都市空間』思文閣出版（2014 年)